

◎アジアの独立と冷たい戦争 e.第三勢力の台頭(2)

第二次大戦後、独立を達成したり他国の影響力を排除してきた新たな勢力はしだいに手を結びはじめた。1954年南アジア5カ国首脳は[1 コロンボ]で会談を行い、アジア=アフリカ会議の開催などを提案、同年、中国の[2 周恩来]首相がインドを訪問し[3 ネルー]首相と会談、「領土主権の相互尊重、相互不可侵、内政不干渉、平等互惠、平和共存」という「4 平和五原則」を発表し、世界に大きな感銘を与えた。そして翌年、インドネシアの[5 バンドン]に29カ国が集まり、同国の[6 スカルノ]やインドのネルーを指導者に、アジア=アフリカ会議が開催された。ここでは先の五原則に「反植民地主義と平和地域拡大」などを加えた「平和十原則」を発表された。こうした勢力は、東西いずれの陣営にも属さないものとして[7 第三勢力]と呼ばれる。

こうした動きはいったん[8 中印]紛争で停滞したが、1961年[9 ユーゴスラビア]のテイトーの呼びかけによって[10 非同盟諸国]会議が開催された。

- ⑥ 1952[11 エジプト革命]…[12 ナセル]ら国王を追い共和政樹立
 - [13 ナセル]大統領…積極中立政策、社会主義に接近(中国承認など)
 - 1956[14 アスワン=ハイダム]建設をめぐり西側と対立→[15 スエズ運河]国有化を宣言
 - ↓
 - [16 スエズ]戦争発生(対英・仏・[17 イスラエル])→世界の批判を浴び、撤退
(第2次中東戦争)
- ⑥ 1954～62 [18 アルジェリア]独立戦争…フランス人植民者が多数居住=独立を拒む
→フランスの政変を引き起こす(第5共和政(大統領[19 ドゴール])成立へ)→1962 独立
- ⑦ア) 1957 初の黒人共和国[20 ガーナ]独立 指導者 エンクルマ
イ) [21 1960]年 アフリカで新たに17カ国が独立([22 アフリカの年])
ウ) 1963[23 アフリカ統一機構](OAU)結成 [24 アジスアベバ](エチオピア)で開催

民族主義の動きはアフリカでも活発化した。アフリカでは 1951年に[25 リビア]が独立、翌1952年には[26 エジプト]革命が発生、共和政が樹立された。大統領となった[27 ナセル]大統領が社会主義に接近する動きを見せたことに反発した西側諸国はエジプトが進めていた[28 アスワン=ハイダム]への援助を打ち切ることがを表明、これに対しエジプトは 1956年[29 スエズ運河国有化]を宣言、利権を脅かされると考えたイギリスや[30 フランス]は[31 イスラエル]とともに[32 スエズ]戦争を始めたが、世界の批判を浴び撤退、これまでの植民地支配は不可能であることを世界に示した。

フランス領の[33 アルジェリア]では 1954年以來、独立戦争が進んでいたが、フランス側は独立を拒み、ついにはフランスでの政変を引き起こし、大戦の英雄[34 ドゴール]を大統領に[35 第五共和政]が生まれることになる。

さらに、1957年、アフリカ初の黒人共和国[36 ガーナ]が独立を実現、[37 1960]年には新たに17カ国の独立国が生まれ、[38 アフリカの年]と呼ばれた。その後もアルジェリアでは戦いが続いたが、1962年独立を達成した。こうして独立を実現したアフリカ諸国は 1963年エチオピアのアジスアベバで[39 アフリカ統一機構](OAU)を結成した。

f.東西対話の進行と対立の再燃

- ① 1953 ソ連で[40 スターリン]死亡→[41 フルシチョフ]書記長(第一書記)に

- 1956 国際政策…[42 緊張緩和]をとなえ、東西間の[43 平和共存]政策を表明
- 1956[44 スターリン批判]の実施(ソ連共産党第20回大会)
政治犯の釈放、言論統制の緩和([45 雪解け]の進行)
大陸間弾道ミサイル(ICBM)開発・[46 人工衛星]成功→西側への優位確立(?!)
→東ヨーロッパ諸国の動揺([47 ハンガリー]事件など)、[48 中ソ]論争発生

1953年、長くソ連の指導者[49 スターリン]が死亡、アメリカでも大統領が[50 トルーマン]から共和党の[51 アイゼンハワー]にかわる中で東西対話が進みはじめた。

ソ連の新たな書記長(第一書記)に就任したのが[52 フルシチョフ]であった。彼は大陸間弾道ミサイル([53 ICBM])の開発や[54 人工衛星]の打ち上げ成功など科学技術面で優位を確立したという自信のもとに、国際政策において[55 平和共存]をとなえ、東西間の[56 緊張緩和]政策(デタント)をすすめることを表明、さらに 1956年のソ連共産党第[57 20]回大会で[58 スターリン批判]を行ない、政治犯の釈放、言論統制の緩和などもすすめ、国民や世界から「雪解け」と歓迎された。しかしこうした急激な方向転換は[59 ハンガリー]事件など東ヨーロッパ諸国の動揺を引き起こし、ソ連の政策を修正主義として批判する[60 中国]との対立も引き起こした。

- ②東西対話の進行
 - 1953 米大統領に共和党の[61 アイゼンハワー]就任(←[62 トルーマン](民))
 - 1953,7 朝鮮休戦協定(ソ連の提案)
 - 1954 [63 ジュネーブ]会議=インドシナ戦争休戦
 - 1955 [64 ジュネーブ四巨頭]会議…米・英・仏・ソ
 - 1959 フルシチョフの[65 アメリカ]訪問=キャンプデーヴィッド会談
- ③冷戦の再燃
 - 1961 東ドイツの人口流出阻止のため[66 ベルリンの壁]構築
 - 1962 [67 キューバ]危機=ソ連のミサイル基地建設←→アメリカ(ケネディ)海上封鎖
⇒核戦争の危機の激化→ソ連の[68 ミサイル基地撤去]により解決

- ④米ソの直通電話([69 キューバ])設置、[70 部分的核実験停止]条約締結

- ⑤ 1963 ケネディ暗殺、1964 政変でフルシチョフ失脚

1953年ソ連[71 スターリン]の死亡とアメリカでの共和党[72 アイゼンハワー]大統領の登場によって東西対話が進みはじめた。7月には[73 板門店]で朝鮮休戦合意が実現、翌年には[74 インドシナ]戦争の休戦も実現。1955年には[75 ジュネーブ四巨頭]会談で米・英・仏・ソの4国の首脳が一堂に会した。とくにソ連第一書記の[76 フルシチョフ]が[77 平和共存]政策をとったことは東西間の緊張緩和をいっそうすすめた。1959年にはフルシチョフ自らアメリカを非公式に訪問、米大統領との間で[78 首脳会談]を持つに至った。

1960年代になると、東西対立は再び激化しはじめた。東ドイツからの人口流出に悩むソ連は 1961年[79 ベルリンの壁]を構築、西側との対立をつよめ、1962年には[80 キューバ]危機が発生、世界は核戦争の寸前に至った。そして[81 ケネディ]米大統領が 1963年暗殺され、ソ連でも 1964年の政変でフルシチョフが失脚し、[82 プレジネフ]が書記長となると東西対話の風潮は弱まり、「冷戦」状態が続いていく。